

研究課題名: 社会科教員養成における信念の象徴分析をふまえたプログラム開発

研究代表者: 猪瀬武則

社会科教員養成では、教えるという教師の仕事に関して、養成側と被養成側が多様で異なる信念や認識をもっているため、養成過程でコミュニケーション不足により、十分な成果が上げられていない。そこで本研究では、社会科教師の仕事に対して、学生・現場教員・養成大学教員・教育行政がそれぞれどのような信念・認識を保持しており、双方にどのような認識ギャップがあるか、それらの予備的調査をした。

予備調査の方法は、30項目からなるリッカートスタイルの質問紙による量的調査とインタビューによる質的調査である。質的調査では、小学校教員の授業実践を視聴後、学生・教員それぞれにインタビューを試みた。結果は次の通り。

第1に、社会科教員をめざす学生の中には、社会科教師の仕事が、知識の増大、暗記と博覧強記の子どもの育成を促進することであると捉えているのは学年や年齢によらず一般的である。第2に、学生教師共に、社会科への習熟の度合や内容理解についての自信(自己申告)に応じて、強くなっている。第3に、教員養成側の教員においては、社会科教師の仕事が、推論や主体的な思考の能力育成であると捉えているのは、経験年数に寄らず多い。第4に、こうした思考力中心の考え方は、社会科の習熟度、教師としての錬成度が高まるに応じて強くなっている。他の理由を示す属性との一元配置の分散分析では、十分な結果が得られなかった。

これらの調査に基づいて「社会科教員の仕事」をシンボリックに類型化し、「社会科教員養成」で必要な技能や資質の基礎を次のように類型化した。すなわち、社会科教員の仕事に関する学生側の認識・信念の象徴は、数量還元・再現・反復・順応のいずれの項目も全学生に共通して強く、社会科を得意とする学生はさらに強い。教員養成側では、質的個別的、独創・自立・論理などの象徴は、教員経験年数が長くなるに連れて強くなっている。

質的調査においても、小学校教員授業の視聴後、学生は「威厳、統制、万能性」の象徴性欠如を読み取っている。子どもに「追い詰められ、狼狽する姿」と誤認し、学生は「立ち往生した」自身と重ね合わせている。このことは、教員養成における学生の持つ信念の象徴的意味合いを対象化させる必要性が明らかとなった。

本研究によって、それぞれがもつ認識や信念の象徴的意味の一端が明らかになり、実効性ある社会科教育養成プログラム開発するための条件を探ることができた。これをもとに、更なる調査を進め、プログラム開発を試みる。